

# 米軍の路線継承から日本独自の化学学校へ進化



元 陸上自衛隊化学学校長 (12 代)  
元 防衛大学校 教授  
**杉浦敏夫 氏**

PROFILE: すぎうら・としお

早稲田大学 理工学部応用化学科卒。1954 年 4 月 陸上自衛隊幹部候補生学校入校、化学教育学校を経て 1959 年 東北大学大学院にて原子核工学を専攻、修士・博士課程を終了。1965 年 技術研究本部第一研究所 対原子力研究室、1968 年 陸幕化学課、防衛研究所 研修員、防衛大学校教官を経て防衛研究所所員。1958 年 3 月 陸幕開発課長、関西地区補給処桂支所長、1982 年 化学学校長、1983 年 8 月 装備開発実験隊長を務め 1986 年退官。1986 年 4 月 防衛大学校 教授、1996 年退職。

## 上田さんとオートバイを並べて東北大へ

——杉浦さんは防衛大学校の 1 期生ですか。

杉浦 いえ、私はいわばマイナス 3 期生。祖父も父も軍人でしたので、防衛大学校があれば間違いなく希望していました。建物はできていましたが、まだ創立されていなかったのです。

それで早稲田大学を出て、防衛大学校を卒業した人たちと一緒に、久留米の幹部候補生学校に進みました。

——一般大学出身の幹部候補生もいるんですね。大学ではやはり化学専攻ですか。



聞き手: 本誌顧問 /NBCR 対策推進機構  
元 陸上自衛隊化学学校長 (17 代)  
**井上忠雄 氏**

PROFILE: いのうえ・ただお

1935 年 高知県生まれ。1959 年防衛大学校卒、陸上自衛隊入隊。1966 年 大阪大大学院博士課程修了、工学博士。1969 年 米国シカゴ大学客員教授、1972 年ジュネーブ軍縮委員会日本政府代表団委員、1982 年 防衛研究所教授などを歴任し 1990 年 陸上自衛隊化学学校長、1991 年 4 月 陸上自衛隊退官。現在 NPO 法人 NBCR 対策推進機構 理事長、CBRNE 研究所長。

(収録日 11 月 4 日)

杉浦 理工学部の応用化学科。そこから化学との関わりが始まりました。

化学教育隊は京都の宇治で発足しましたが、その後 富士学校という大きな組織の傘下に入り、昭和 32 年に化学学校に格上げされることになり、場所としては埼玉県の大宮に決まりました。私は移駐前の富士へ着任しました。

井上 先生のお父さん、杉浦辰雄中将がいらっしゃったところですね。

杉浦 父はその大元である十条の東京造兵廠にいました。

大宮は光学器械をつくる造兵廠製作所の跡地です。米軍が

撤退した後、そこに移ることになって、我々は先発隊として入りました。

ガラスも割れてだいぶ荒れていたのを整備し、部隊で食事を用意し、後発隊を招いて、昭和32年(1957)10月15日に化学学校を旗揚げしたのです。

井上 正に草創の時代です。

先生は部外理工学研修の1期生ですね。

杉浦 旧陸軍では、明治41年以来将校を理工系の学生として帝国大学に派遣する制度がありました。終戦で途絶えましたが、陸上自衛隊の幕僚監部が自衛官を大学院に出す制度を復興させました。昭和34年、私達の階級が三尉、二尉となった頃です。

その第1回に上田愛彦さんと私もいます。貴誌に上田さんが私と「オートバイを並べて一緒に仙台に行った」というエピソードが掲載されていましたが、東北大学大学院で修士課程・博士課程を修了させてもらいました。

井上 私は第3回で、大阪大学です。先生が先駆となった、その制度は今も続いています。

杉浦 連綿と続いているのは、じつに感慨深いことです。

防衛大学校には修士課程並みのコースもできていますが、やはり部外の修士課程と並行して勉強したほうがいいと思います。

井上 東北大学大学院では原子核工学を専攻されたのですか。

杉浦 自衛隊にCBR防護の専門家を育てなければならないという本部の考えで、原子核工学の研究室に入りました。

昭和40年(1965)に研修を終って帰ってくると、適任ということで、目黒にある当時の技術研究本部第一研究所、対原子力研究室に配属されました。

核をつくる施設と誤解されないように、原子力研究室ではなく、anti(対)を付けて対原子力としています。

井上 私は2年後に技術研究本部第一研究所の化学防護研究室に配属されました。先生のすぐ向かいの部屋でしたね。と一緒に数年間、勤務しました。

先生が技本に入られる直前でしたか、中国の核実験がありましたね。

杉浦 当時、世界で公に核を持っていたのはアメリカ、ソ連、イギリス、フランスでしたが、中国も核を持ちたいと、昭和39年10月16日以降度々核実験をしました。ひどいことに、オープンでしたので、偏西風に乗って灰がたくさん飛んできました。

内閣に対策本部が作られ、我々、対原子力研究室が徹夜で分析しました。その様子はNHKで放送され、私も出演しています。

——いわゆる「死の灰」は、日本にかなり影響を及ぼしたんですか。

杉浦 部分的にはたいへん大きかったと思います。研究所敷

地内の土にガイガーカウンターを近づけると、警告音とともに針が振り切れてしまいます。福島原発以上だったかもしれません。問題視する人がいなかったのが、今のように報道されませんでした。

井上 航空自衛隊で塵を集めるんですね。

杉浦 F86という戦闘機に集塵ポットを付けて、西から偏西風に乗ってきた塵を採取し、直ちに目黒に運んで分析しました。

——そのことがあるから、中国は日本の原発事故にあまり文句を言えないんでしょう。

杉浦 中国は原発をたくさんつくっていますが、日本のように厳密な管理ではなく、ルーズだと聞いています。もし原発事故が起きたら、その塵がいつ同じ経路で飛んでくるかわからない。私は関係の人に「考えておかんといかんぞ」と言っています。

## 米ソの核競争が激しかった時代の研修所

井上 技術研究本部に約3年おられて、その後はどちらに行かれましたか。

杉浦 陸幕に行って、まず化学課でCBR防護を担当しました。

次に、6階のいちばん端にあった化学課から、反対の端にあった4部研究班に異動になって、理工学研修推進を担当しました。部外理工学研修の経験者ということで、今度は自衛官を大学院に派遣するほうになりました。

井上 いわゆる研修係ですね。

杉浦 そうです。旧軍は派遣をすればぜんぶ受け入れてくれましたが、自衛官は一般の人といっしょに試験を受けます。その折衝などのために全国の大学を回りました。

修了者によるさつき会は今年も毎年、開催されています。私は一度会長を務めましたので、会長OBという身分になっています。

陸幕で約2年間勤めた後、防衛研修所(後の防衛研究所)に行きました。

——防衛研修所というのは。

杉浦 制服の二佐・一佐クラスや背広の方々が、一緒に勉強するところです。研修員として10か月間学び、防衛大学校の教官を2年ほど務めた後、昭和50年(1975)に所員として防衛研修所に戻りました。

井上さんは研修員を経ずに、いきなり所員でしたが。

井上 私は統合幕僚学校を卒業して、防衛研修所に行きました。

所員(現在は職員)という名称ですが、一般大学では教授です。

杉浦 所属の研究室長は桃井真さんでした。娘さんは有名な俳優です。



——桃井かおりさんですね。

杉浦 桃井室長はキッチンジャーとハーバード大学の同僚です。当時は米ソの核競争が非常に激しく、中曽根内閣の、核に関する貴重なプレーンでした。

日本は核武装しないことになっていますが、やはり核の問題は研究しておかなければなりません。

——どの程度の研究をしていたのですか。

杉浦 防衛研修所は研究機関ですから、内部にタブーというものはありません。全くの言論自由でした。

井上 日本が核を持つとか持たないということではなく、核に関する研究です。

杉浦 米ソの時代、なぜ核がそれほど世界を牛耳ることになったかから始まって、日本が核を持つと仮定するとどうなるかといったことも、考えていました。

研修員に教えたのは、核保有国の現状と、核を巡る新興国の実情です。

——それから、杉浦先生は陸幕4部で開発課長をされますね。どのようなものを開発されたんですか。

杉浦 当時、陸上自衛隊はビッグファイブと言われる5つの装備に焦点を合わせていました。その一つが64式戦車の後を継ぐ、いわゆる新戦車です。

井上 油圧の姿勢制御機能を備えた、74式戦車ですね。

杉浦 国産の対戦車誘導弾ATM-3、いわゆる「中MAT」もつくりました。また、装甲車は履帯で進む装軌装甲車が一般的ですが、タイヤを付けた装輪装甲車を開発しました。

井上 装備上でも、日本の自衛隊が新しい技術によっていちだんと進歩する、大きな改革の時期でした。

杉浦 その後、昭和55年(1980)から、関西地区補給処の桂支処長(京都)を1年半ほど務めました。

井上 当時、私は宇治の化学部長でした。宇治が本処でしたから、月に一度、会合のために支処長が集まるので、杉浦先生ともお顔を合わせていました。

## 外敵の脅威から化学テロや事故の時代へ

井上 それから化学学校に行かれるんですね。

杉浦 昭和57年7月、第12代の化学学校長になりました。

——当時はどのようなところでしたか。

杉浦 遡ると、米軍の組織を学んで、前身の警察予備隊、保安隊をつくっています。軍隊にはCBRが必要ということで、当時の小さな自衛隊にも、CBR防護のために化学の職種を設けました。その考えがずっと続いていました。

——最近ではテロ対処での活躍も相当期待されていますね。

杉浦 化学・生物・放射性物質・爆発物・核の頭文字を取ってCBREN(シーバーン)と言いますが、日本の自衛隊は少し異色であり、旧軍隊の枠を超えてテロにも備えています。そのために、井上さんが頑張ってくれています。

井上 杉浦先生が化学学校校長の頃、中国やインド、パキスタンが核実験をしましたし、イランや北朝鮮が核の能力を高めるなど、軍事的な脅威が非常に強かった。それらに対して、化学学校がCBR防護の能力を育てていかなければならない、ということが主体でした。

テロや自然災害に化学関係の事項が含まれるようになるのは、我々が定年になった後、90年代以降のことです。

杉浦 米軍から引き継いだ、自衛隊のCBR防護でしたが、サリン事件や東海村の臨界事故、さらに福島原発事故などが起きて、範囲がずっと広がっていきました。

井上 その後の昭和58年8月から、実験隊に行かれるのですね。

杉浦 今は富士の開発実験団になっていますが、当時はまだ装備開発実験隊でした。

自衛隊の装備は背広の集団が研究所で検証しますが、実際に部隊で使うためには実務的な試験をしなければなりません。その装備開発実験隊長が私の最後の勤めでした。

井上 先生は職種としての化学科をずっと育てながら、大勢の人材も育てられました。

杉浦 自衛官は、あるときに狭い視野、あるときに広い視野で務めなければなりません。

私の場合、陸幕の開発課時代には陸上自衛隊全体の装備開発の責任者となり、化学学校校長で化学専門教育の責任者となり、最後にまた実験隊で陸上自衛隊全体の責任者となりました。

井上 昭和60年(1985)に55歳の定年で退官され、防衛大学の教授になられました。

どのような科目を教えられましたか。

杉浦 武器史とCBRです。

背広で65歳の定年まで教授を務めました。

東京大学・京都大学は63歳ですが、その他の国立大学は65歳です。防衛大学校もそれに準じています。

——テロや災害の懸念によって、化学学校がクローズアップされています。予算面ではいかがですか。

杉浦 自衛隊の予算はご承知のように1%以下で、どのセクションもたいへん厳しい状況ですが、化学科だけは伸びています。

井上 杉浦先生の頃は陸幕にまだ化学課がありましたが、一時、班に縮小されるなど、元々の世帯が小さいので、伸び率が非常に大きくなっています。

杉浦 これほど予算が増えているセクションはありません。他



は昔と同じです。

——人員の面も力を入れていますか。

井上 人員も少しずつ増やしてきました。

陸上自衛隊には9個師団、6個旅団ありますが、各師団長・旅団長の下に独立した化学防護隊がつけられ、化学科の人員は約1000人になっています。

その幹部は化学学校で教育を受けた者です。我々の時代は非常に苦労しましたが。

——先生方のご尽力の賜ですね。

杉浦 職種 of 化学科はいわば米軍の真似をしてつくられたので、技術も化学も嫌いというような人が教育訓練部長になったり、陸幕長になったりして、化学などもっと減らせという時代もありました。

井上 一昔前、いちばんの脅威はソ連の核、化学戦力でした。ソ連などの外敵が攻めてきたとき、核や化学兵器・生物兵器に対して、いかに防護するかが主体でした。

米ソ冷戦が終わると、今度はテロの時代、化学災害の時代になり、だんだんと国民にも認められて、人員も予算も増えてきているのです。

杉浦 一般の国民の皆さんが化学学校の存在を認識するようになりました。オウム事件などの不幸な出来事がなければ、昔の化学のままだったかもしれません。

### 折に触れて専門教育の重要性をアピール

井上 先生のご経歴は、開発の時期、教育の時期、研究の時期と、大きく三つに分けられると思います。

杉浦 自衛官は一つの分野をずっと続けることができません。ただ、私は幸いにも技術関係という範囲で仕事をすることができました。

井上 化学学校長当時のことで、印象に残っていることは何かありますか。

杉浦 いわば化学のJOCですが、周りは認識してくれません。それで、折に触れてPRしていたことをよく覚えています。

井上さんは私の後、第17代の校長ですが、いかがでしたか。

井上 同様に私も重要性をしきりにアピールしました。

杉浦 化学学校の隣に旧大蔵省の官舎がありました。何の毒性もない発煙筒の煙が流れていくと、住民の人から「あの施設はへんな研究をしている」と抗議がありました。

井上 私のときは、隣に高いビルができて、上から共産党が監視していました。

「化学学校は核爆弾をつくっているのか」と「赤旗」に書くので、学校内を見せることにしました。防護服を着せて内部を



案内すると、化学防護の訓練は必要と納得してくれて、それ以来、書かれなくなりました。

杉浦 この十数年、化学学校の式典に大宮市の市長さんが出席して、「おかげで私たちは安心して暮らせる」と言います。全く逆転しました。

井上 地下鉄サリン事件や福島原発事故が起きて、今は黙っていても重要性が認識されるようになってきました。

——これから化学科の人気のますます高まるのではないですか。

杉浦 そうでしょう。セクションの定員も、防大卒、一般大卒ともに増えています。

井上 この10月15日に化学学校創立57周年の記念式典が開催され、杉浦先生が現校長以下、現役の連中に祝辞を述べられました。

杉浦 第9代の校長を務められた竹澤力夫さんは、宇治、富士、大宮をご存じの方ですが、90歳を超えて、お元気で出席されました。

総務課長は「竹澤さんが祝辞で、杉浦さんは宴会のときに乾杯の音頭をお願いします」と言うので、安心していました。しかし竹澤さんが「出席はするが、もう高齢なので祝辞はしないよ」とおっしゃって、急に私の出番になってしまいました。

井上 それで今度は私に、乾杯のお鉢が回ってきたわけです。

杉浦 NBCR対策推進機構のアピールもできたでしょう。

井上 この9月に弊NPOの監修で創刊した、わが国初のCBRNE専門情報誌を持参して、CBRENの話をしました。諸外国では少佐や中佐が投稿している、日本の皆さんもと呼び掛けました。

杉浦先生は祝辞で「富士から大宮に移ってきた頃からすると隔世の感がある」と始められて、非常に良いお話をされました。

おっしゃるように、これからは、外敵からのCBR防護だけでなく、自然災害、テロを含めた人為的な災害にも出動するような、オールラウンドの化学科の時代になってきました。

——今年は戦後70年という節目、そして化学学校の57年という節目で、杉浦先生はじめ先生方の功績は計り知れません。

本日はありがとうございます。